

イラスト：空路遊程 制作：編集集団140B
発行：堺市長公室広報部 行政資料番号/1-C3-16-0331

外国人観光客の乗車も増えている「阪堺電車」を舞台にしたオムニバスドラマを堺市が企画制作。高校生たちがワークショップで書いた6本の脚本を原作に羽衣国際大学メディア映像学科の学生たちが映像化。明治生まれの阪堺線に平成生まれ世代の新しい風が吹き込まれた。脚本監修した今井雅子さんはNHK連続テレビ小説「てっぺん」でもチン電を重要なシーンで使っていたが、ここでも「普段着の乗り物」への愛が伝わってくる。ちなみに、綾ノ町停留場の北と南にあるカーブは、撮影者にとってもおいしいポイントみたい。スマホでも動画が観られるので、堺市のホームページからアクセスを。



主演俳優、チン電。

桶屋に未来の風。



20世紀初頭の堺で最盛産業の「酒造」を支えた樽と桶。大正6年(1917)、堺には樽桶業者が47軒を数えたが、今や上芝雄史さんが所属する西区の「藤井製桶所」1軒のみ。大桶による仕込みが、コストや洗手間のためにホローやステンレスのタンクに代わったからだ。しかし21世紀に入ると、「計算された旨さ」を拒否してあえて木桶で仕込む酒蔵や醤油蔵が現れたことで、桶の発注が増えた。国内で仕込み桶を製造・修繕できる業者は「藤井製桶所」くらい。それで全国の酒蔵や醤油蔵の人が技術を教わり堺にやって来る。上芝さんが「店じまい」しても、桶を作り、面倒を診られる人間を育てるためだ。

「名人」として知られる堺区の「銀シャリ屋 グロウ」の村嶋孟さんは、美味しいご飯の炊き方の指導をするために中国政府から3年間招かれている。村嶋さんの実家は以前、邸宅や別荘を清掃する「家洗い屋」を営んでいた。「客はお金持ち。父はお茶や花・書・画・骨董・笛・尺八も嗜んだ」そう、仕出しの料理を父と一緒に味わい、舌が自然に肥えたという。戦争で堺の町は焼けても、その舌は生きていた。昭和38年(1963)に開店。炊飯用の井戸水は、千利休が用いていた井戸と同じ水系の水だった。お茶の力で戦国の世を終わらせた利休の時代から400年余り、今度は「ご飯」の力で日中の平和を支える。



クール、いえ、熱々ジャパン。



東京五輪などで世界と戦った選手時代を経て、初代チェアマンとして1993年のJリーグ創設を牽引、現在は日本サッカー協会(JFA)最高顧問として数十年先を見ずえる川淵三郎さんの夢は「一流の施設で一流のコーチがサッカー少年少女を育てる」と。2010年、堺区の大阪ガス工場跡に広大な「堺市立サッカー・ナショナルトレーニングセンター(J-GREEN堺)」が誕生。天然芝もある国内最高峰のピッチで子どもから日本代表までが練習に励む。府立三國丘高時代に「試合で四国に行ける」という理由でサッカー部に入った60年あまり後、女子選手の強化を目的とした「JFAアカデミー堺」では海外遠征も行われ、世界レベルの選手が育つ。

堺小ネタ帖



長さ9メートルもあるこいのぼりを、下描きをせず何十種類もの刷毛や筆を使って手描きで仕上げる西区の「堺五月鯉織工房 高儀」六代目・高田武史さん(大阪府伝統工芸士)。こいのぼりが江戸時代中期にはじまった頃は和紙で造られていたが、この工房が明治時代の半ばに日本で初めて綿布でこいのぼりを造り、今や世界各国に顧客を持つ。七代目となる後継者の恵さんが考案した新商品の小物も新しいファンをつかんでいる。特大のこいのぼりは、重要文化財の山口家住宅(堺区)の高い天井のある広々とした土間で、GW前後に見ることができ。

Sakaiから世界の空へ。



アナゴスケエア。

かつて堺の出島港では穴子の延縄漁が盛んで、南海本線湊駅付近の海ぎわは「穴子屋筋」と呼ばれていた。現在はその数こそ少なくなったが、堺区にある持ち帰り寿司の専門店「深清鮓」は時代の名残を留める65年以上現役の店。三代目の深井壽光さんが親戚の穴子屋さんから仕入れ、家族中心で作る穴子寿司に地元固定客から海外の旅行者まで幅広いファンがつく。ひと口食べるとファンにならずにはられない、とろける「穴子のにぎり」や香ばしき満点の「穴子の箱寿司」の出来たてを、持ち帰りが待てない国内外の客さんが店の前のベンチでおいしそうに頬張っている。

世界を旅したカメラマンの小野晃哉さんがその建物を見た瞬間に入居を決めたのは、明治末期に建てられたアールデコ調の紡績工場。「自分だけのものにはいけない」とは思っていたが、近所に挨拶に行ったときに「あの建物に入ってくれてありがとう」と言われ、その思いが確信に変わったという。小野さんは、定期的にイベントやコンサート、フリーマーケットなどを開催、今や地元住民や堺ビジターの「広場」になっている。ふだんは家族の写真も撮ってくれるスタジオだが、イベント時にはバブリアック空間に。建造物に敬意を表し、「スピニング・ミル(紡績工場)」と命名。2015年度には堺市景観賞特別賞を受賞した。



「紡績工場」という広場。

アースダイバー堺。



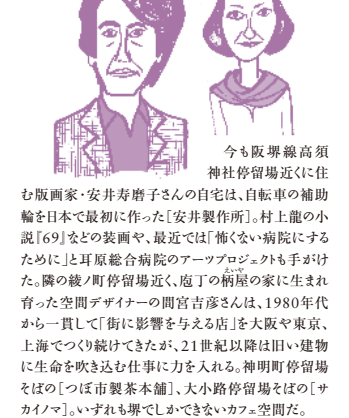
「くに」や「都市」の成り立ちと変遷を、古地図や地形図、そして旺盛なフィールドワークで解き明かす「アースダイバー」で新しい歴史観を提示した人類学者の中沢新一氏(明治大学野生の科学研究所所長)が、2016年の1月に訪れた場所は「堺」だった。百舌鳥古墳群を中心としたフィールドワークの成果は翌日、堺商工会議所の大会議室にて披露され、全国から集まった多数の受講者が聞き入った。中沢先生曰く「アースダイバー堺」はテーマの宝庫。また来たಿದೆす。堺で再会できる日が待ち遠しい。

堺区「自転車博物館サイクルセンター」での一コマ。「さて、ここで問題です。自転車はやがてタイヤに空気を入れて走るようになりますが、それを発明した人はだれでしょう?」NPO法人堺観光ボランティア協会理事長の川上浩さんは常々「一方的な説明しかしないボランティアガイドは絶対にダメ」と言い切り、サービス精神やコミュニケーションの大事さを会員一人ひとりに説く。心がけているのは「観光客が質問しやすい空気」。そのために冒頭のような「クイズ」も出題する。ちなみに正解は「ダンロップ」。子ども好き獣医さんの、後世に残るグッドジョブでした。

堺好き拡散術。



ものづくりタウンの申し子。



今も阪堺線高須神社停留場近くに住む版画家・安井寿磨子さんの自宅は、自転車の補助輪を日本で最初に作った[安井製作所]。村上龍の小説「69」などの装画や、最近では「怖くない病院」にするために「耳原総合病院のアッププロジェクト」も手がけた。隣の綾ノ町停留場近く、庵丁の柄屋の家に生まれ育った空間デザイナーの間宮吉彦さんは、1980年代から一貫して「街に影響を与える店」を大阪や東京、上海でつくり続けてきたが、21世紀以降は古い建物に生命を吹き込む仕事に力を入れる。神明町停留場そばの「つばね製茶本舗」、大小路停留場そばの「サカイノマ」。いずれも堺でしかできないカフェ空間だ。